

# 『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターに見る 順接・逆接の接続詞の通時的変化

近藤 明日子（東京大学 大学院人文社会系研究科）<sup>†</sup>

## Diachronic Variation of Illative and Adversative Conjunctions: An Analysis with the Magazine Register of the Showa-Heisei Corpus of Written Japanese

KONDO Asuko (University of Tokyo)

### 要旨

『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターを用いて、昭和・平成期の非文芸ジャンルの書き言葉における順接・逆接の接続詞について考察した。まず、コーパスから作成した短単位 n-gram を用いて接続詞語形を網羅的に抽出したところ、順接の接続詞は 31 語形、逆接の接続詞は 17 語形が確認できた。これらの語形について口語文体（常体多 / 敬体多）割合を分析すると、語形と口語文体割合には対応関係が見られ、それは各語形の書き言葉的・話し言葉的性質の強弱と対応していることが明らかになった。次に、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』のデータと合わせて、刊行年別に接続詞の各語形の使用サンプル率を算出し、明治期から平成期までの量的な通時的変化を概観した。話し言葉的性質の強い語形が増加すること、また特に常体多の口語文体では語形の整理が進み、少数の語形が使用されるようになることが明らかになった。

### 1. はじめに

明治・大正期は、書き言葉の文体の標準が文語体から口語体へと大きく変化した時期である。そして、その中で使用される語彙も大きく変化し、接続詞もまた例外ではない。その様相は、当時の総合雑誌を収録した国立国語研究所 (2019) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』（以下、「CHJ 雑誌」と呼ぶ）から抽出した順接・逆接の接続詞の語形群の通時的変化と文体変遷との対応関係を分析・考察した近藤 (2021a) (2021b) に詳しい。当時の総合雑誌において文語体から口語体への文体転換は大正末期に完了したが、口語体の内部の変化はそれ以降も続き、昭和・平成期を経て現在の書き言葉につながっている。そこで、昭和・平成期の接続詞の変遷の実態を辿るため、本稿では小木曾ほか (2023) 『昭和・平成書き言葉コーパス』の雑誌レジスター（以下、「SHC 雑誌」と呼ぶ）を利用し、近藤 (2021a) (2021b) の手法に倣い、順接・逆接の接続詞を網羅的に抽出し、文体（常体/敬体）との対応関係を分析する。そして、CHJ 雑誌のデータと合わせて、明治期から平成期までの接続詞の量的な通時的変化を概観する。

### 2. 先行研究

近現代語の資料からの接続詞の網羅的抽出とその量的な通時的変化の考察を行った先行研究として、まず京極・松井 (1973) がある。これは古代から近代までの各時代の接続詞の語形とその頻度を掲出し考察するもので、そのなかで近現代に相当する接続詞の考察は明

---

<sup>†</sup> akondo [アットマーク] l.u-tokyo.ac.jp

治 17 年から昭和 31 年成立の文芸作品 16 作品を対象として行っている。その他、石田 (2009) は、1906～2006 年の雑誌『中央公論』から 10 年間隔で各年 1 万語をサンプリングした計 11 万語のテキストから、国立国語研究所 (編) (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』に掲出の接続詞を抽出し、その量的な通時的変化を考察するものである。本稿は、総合雑誌という多種の分野の文章を掲載する資料における非文芸ジャンルの書き言葉を対象とする点で、文芸作品を対象とする京極・松井 (1973) とは異なる。また、石田 (2009) とは対象とする資料が重複するが、本稿は SHC 雑誌だけで 2300 万語という大規模なテキストを対象とし、また特定のリストに拠らず、できるかぎり多くの語形の抽出を試みる点で、近現代の接続詞の通時的変化をより精緻に明らかにすることができると思う。

### 3. 使用するコーパスとテキスト

本稿で研究資料とする SHC 雑誌は、昭和・平成期の代表的な月刊総合雑誌『中央公論』『文芸春秋』の 1933 年～2015 年の間の 8 年おき 11 か年分を収録刊年とし、各年 1 誌分の通常号 12 冊、計 132 冊の全文を収録したコーパスであり、CHJ 雑誌と接続して利用することを想定した設計となっている (近藤 2023)。

SHC 雑誌は 1 記事=1 サンプルとして、テキストをサンプル単位に分割して収録し、各サンプルにはジャンル情報を付与する。本稿では、文芸ジャンル (小説・戯曲・詩歌) を除いた非文芸ジャンルのサンプルを研究対象テキストとした。ただし、非文芸ジャンルのサンプルのうちサンプル ID の末尾が「000」のサンプル (雑誌 1 冊から記事部分を除いた残りのテキストを集めたサンプル) は除いた。

また、接続詞の語形と文体との対応関係を分析するにあたり、文末辞「だ」「である」を主に使用する「常体多」のサンプルと「です」「ます」を主に使用する「敬体多」のサンプルに分類した。近藤 (2021a) (2021b) での方法に倣い、敬体の文末辞「です」「ます」「でございます」「であります」と常体の文末辞「である」「だ (意志推量形・終止形のみ)」の頻度をサンプルごとに集計し、文末辞の頻度合計に対する敬体の文末辞の頻度合計の割合が 0.5 以上のサンプルを「敬体多」、0.5 未満のサンプルを「常体多」とした。以下、「常体多」「敬体多」で分類する文体を「口語文体」と呼ぶ。

次の表 1 に、研究対象テキストのサンプル数と延べ語数 (記号類・未知語類は除く) を口語文体・刊行年ごとに示す。

表 1 研究対象テキストのサンプル数と延べ語数

刊行年	常体多		敬体多		合計	
	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数	サンプル数	延べ語数
1933	480	2,213,394	84	233,566	564	2,446,960
1941	402	1,843,996	24	185,410	426	2,029,406
1949	167	673,923	28	172,353	195	846,276
1957	599	2,248,305	114	426,799	713	2,675,104
1965	935	1,467,400	200	217,236	1,135	1,684,636
1973	593	1,714,941	164	295,979	757	2,010,920
1981	587	1,942,241	253	365,484	840	2,307,725
1989	853	1,733,782	388	761,363	1,241	2,495,145
1997	734	1,652,672	288	650,734	1,022	2,303,406
2005	895	1,419,814	380	848,046	1,275	2,267,860
2013	750	1,128,847	530	1,307,663	1,280	2,436,510
計	6,995	18,039,315	2,453	5,464,633	9,448	23,503,948

表 1 の口語文体の延べ語数の割合の通時的変化を示したものが図 1 である。

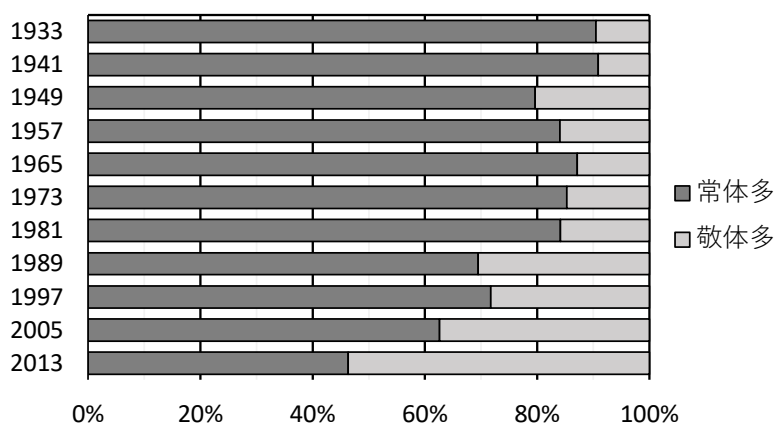


図 1 口語文体の延べ語数の割合の通時的変化

図 1 によれば、1981 年までは常体多が約 80~90%を占めていたものが、以降その割合を減らし、2013 年は敬体多のほうが過半を占めるに至る。このように SHC 雑誌の非文芸ジャンルのサンプルでは常体多の減少と敬体多の増加という口語文体の変化があることが明らかになった。

#### 4. 短単位 n-gram による接続詞の抽出

次に、3. で定めた研究対象テキストから接続詞を抽出する方法とその抽出結果について述べる。SHC 雑誌の語の単位は「短単位」と呼ばれる比較的短い単位である。接続詞は複数短単位の連続で構成される場合も多いため、品詞が「接続詞」の 1 短単位のみを抽出しても網羅的な抽出ができない。そこで、近藤 (2021a)(2021b) に倣い、対象テキストから 1~8gram の短単位の n-gram を作成し、そこから接続詞と考えられるものを独自の判断で抽出する方法をとった。接続詞の可能性の高いものを効率的に抽出するため、抽出の対象とする n-gram

は文頭<sup>1</sup>のもの、かつ出現するサンプル数が 95 以上（対象テキストの全サンプル数 9448 [表 1 参照] の 1%以上）のものに限った。そして、1gram からは品詞が「接続詞」のものを接続詞として抽出した。2～8gram からは『日本国語大辞典 第 2 版』（小学館）等の辞典類や青木 (1973) 等を参照しつつ、そこには載っていない語形も含め、独自の判断で順接・逆接の接続詞を抽出した。接続詞の用法分類は市川 (1976) に拠り、「二つの事柄を論理的に結びつけて述べるのに用いる」接続詞のうち、「前の内容を条件として、それから生じる結果を導く」ものを順接、「前の内容に反する内容を導く」ものを逆接と認定した<sup>2</sup>。

以上の方法により抽出した順接の接続詞の全語形を示したものが表 2、逆接の接続詞の全語形を示したものが表 3 である。表 2・表 3 とも、語形は五十音順に掲出し、口語文体別に粗頻度 (a) ・使用サンプル数 (b) ・使用サンプル率 (c) を示した。使用サンプル率とは、各口語文体の全サンプル数（常体多は 6995、敬体多は 2453、表 1 参照）に対する該当語形の使用サンプル数の割合を示す。

表 2・表 3 にあるように、調査対象テキストから順接の接続詞は 31 語形、逆接の接続詞は 19 語形が抽出された。

---

<sup>1</sup> 文頭に記号類がある場合は、それを除いて短単位 **n-gram** を作成した。

<sup>2</sup> 語形単位で接続詞を認定したため、個々の用例の中には接続詞ではないもの、接続詞であっても別用法のものが含まれる場合もある。ただし、以下の (1) (2) の場合については、該当語形からあらかじめ該当用例を除外する処理を行った。

- (1) 接続詞として認定した別の短単位 **n-gram** が含まれている場合。具体的には「これによって」から「これによってみれば」「これによってみると」「これによってみるに」「これによってみても」を除外、「それなら」から「それならば」を除外、「それゆえ」から「それゆえに」を除外、「しかし」から「しかしながら」を除外した。
- (2) 後接語から明らかに接続詞ではないと判断できる場合。具体的には「そのけっか」から「そのけっかは」「そのけっかと」は除外した。

表 2 順接の接続詞の粗頻度(a)・使用サンプル数(b)・使用サンプル率(c)

語形	常体多			敬体多		
	(a)	(b)	(c)	(a)	(b)	(c)
かくして	422	272	3.9%	24	17	0.7%
こうなると	166	144	2.1%	21	20	0.8%
これによって	133	122	1.7%	24	22	0.9%
されば	170	103	1.5%	11	8	0.3%
しからば	260	171	2.4%	6	6	0.2%
したがって	2,868	1,218	17.4%	342	192	7.8%
じゃあ	68	54	0.8%	58	48	2.0%
すると	993	619	8.8%	471	302	12.3%
そうしたら	76	65	0.9%	133	91	3.7%
そうすると	177	137	2.0%	273	154	6.3%
そうすれば	163	153	2.2%	88	75	3.1%
そうなると	188	168	2.4%	116	88	3.6%
そうなれば	82	75	1.1%	44	38	1.5%
そこで	3,515	1,752	25.0%	1,244	586	23.9%
そしたら	62	47	0.7%	74	61	2.5%
そのけっか	532	437	6.2%	188	132	5.4%
そのため	973	713	10.2%	374	261	10.6%
そのために	503	406	5.8%	229	182	7.4%
それで	2,382	1,374	19.6%	1,605	623	25.4%
それなら	178	157	2.2%	63	54	2.2%
それによって	94	79	1.1%	35	33	1.3%
それによると	105	92	1.3%	22	21	0.9%
それゆえ	200	137	2.0%	24	21	0.9%
それゆえに	241	139	2.0%	5	5	0.2%
だから	3,825	1,736	24.8%	2,325	675	27.5%
で	350	261	3.7%	260	147	6.0%
ですから	51	45	0.6%	766	353	14.4%
では	751	499	7.1%	282	189	7.7%
とすれば	127	110	1.6%	13	11	0.4%
ならば	92	83	1.2%	35	30	1.2%
ゆえに	369	192	2.7%	32	27	1.1%

表 3 逆接の接続詞の粗頻度(a)・使用サンプル数(b)・使用サンプル率(c)

語形	常体多			敬体多		
	(a)	(b)	(c)	(a)	(b)	(c)
が	1,673	776	11.1%	228	125	5.1%
けれど	863	433	6.2%	244	149	6.1%
けれども	739	364	5.2%	170	103	4.2%
しかし	18,128	4,072	58.2%	5,022	1,041	42.4%
しかしながら	714	381	5.4%	88	58	2.4%
しかるに	1,020	460	6.6%	39	25	1.0%
それでも	853	659	9.4%	369	284	11.6%
それなのに	211	185	2.6%	94	82	3.3%
それにもかかわらず	225	188	2.7%	18	18	0.7%
だが	6,222	1,970	28.2%	505	204	8.3%
だけど	127	82	1.2%	314	145	5.9%
だって	108	92	1.3%	118	84	3.4%
でも	837	416	5.9%	1,696	530	21.6%
といっても	148	131	1.9%	44	43	1.8%
ところが	4,316	2,047	29.3%	1,920	715	29.1%
とはいえ	203	179	2.6%	86	71	2.9%
にもかかわらず	294	253	3.6%	64	59	2.4%

## 5. 接続詞の語形と口語文体との対応関係

次に4.で抽出した接続詞の語形と口語文体との対応関係を分析する。口語文体の使用サンプル率の割合を示したものが図2・図3である。図2・図3とも常体多の割合の高い順に語形を掲載した。

図2・図3によれば、順接・逆接の接続詞ともに、常体多の割合の高い語形から敬体多の割合の高い語形まで様々である。そのなかで、各口語文体の割合が高い語形は該当口語文体との対応関係が強いものである。敬体多のサンプルは、インタビューや座談会を記録した談話体の文章も多く、話し言葉的性質の強い文章と言える。対して常体多のサンプルは相対的に書き言葉的性質の強い文章と言える。よって、常体多の割合の高い語形は書き言葉的性質が強く、敬体多の割合の高い語形は話し言葉的性質が強いと見做すことができる。例えば、「しからば」「それゆえに」「かくして」「されば」「しかるに」等は書き言葉的性質の特に強い語形、「ですから」「そうしたら」「だけど」等は話し言葉的性質の特に強い語形となる。このように、接続詞の語形と口語文体との間には対応関係が認められ、それは書き言葉的あるいは話し言葉的性質の強弱との対応関係と見做される。

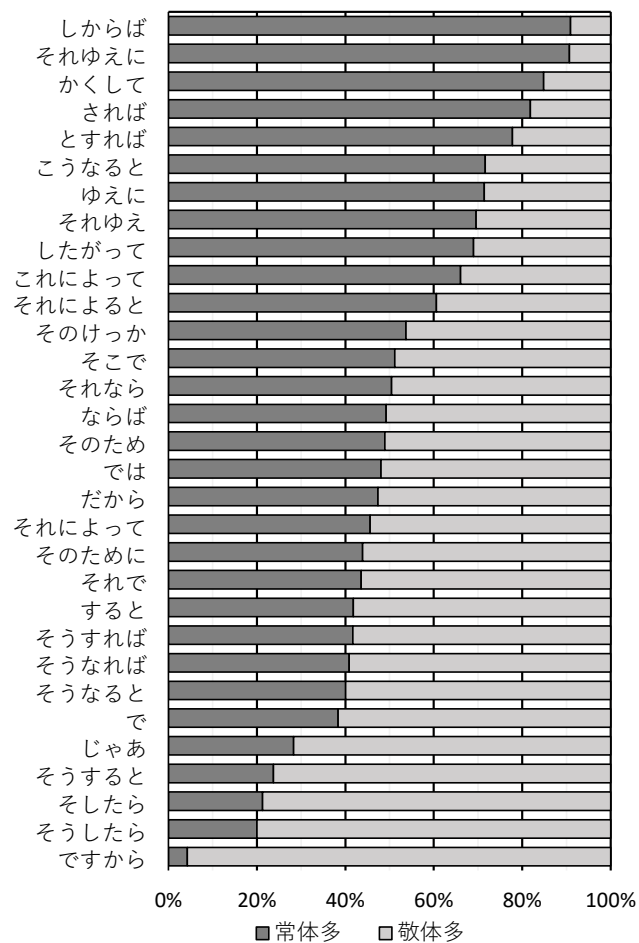


図 2 順接の接続詞の使用サンプル率の口語文体割合

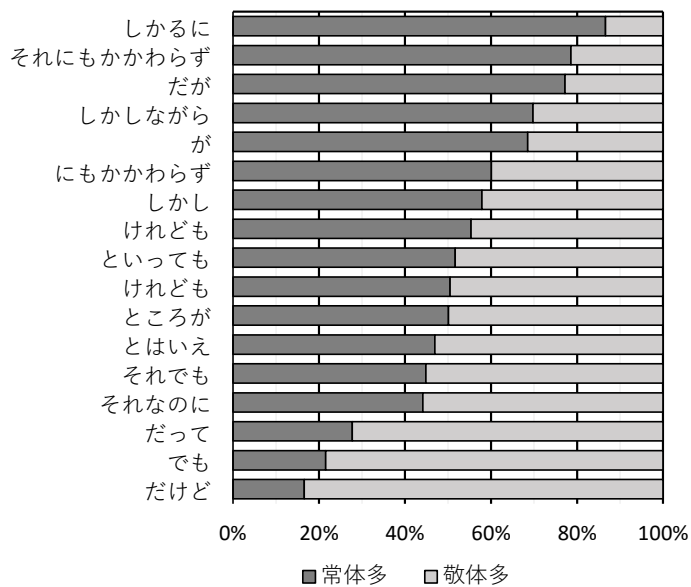


図 3 逆接の接続詞の使用サンプル率の口語文体割合

## 6. 接続詞の量的な通時的変化の分析

次に、抽出した接続詞の語形の量的な通時的変化について分析する。分析は使用サンプル率に基づくこととするが、分析の前提として、4. で抽出した接続詞が使用されるサンプルの全サンプル数に対する割合の通時的変化を確認する。表2・表3にあげた接続詞の語形のいずれかが1例以上使用されるサンプル数の全サンプルに占める割合を接続詞用法・口語文体別に示したものが図4である。

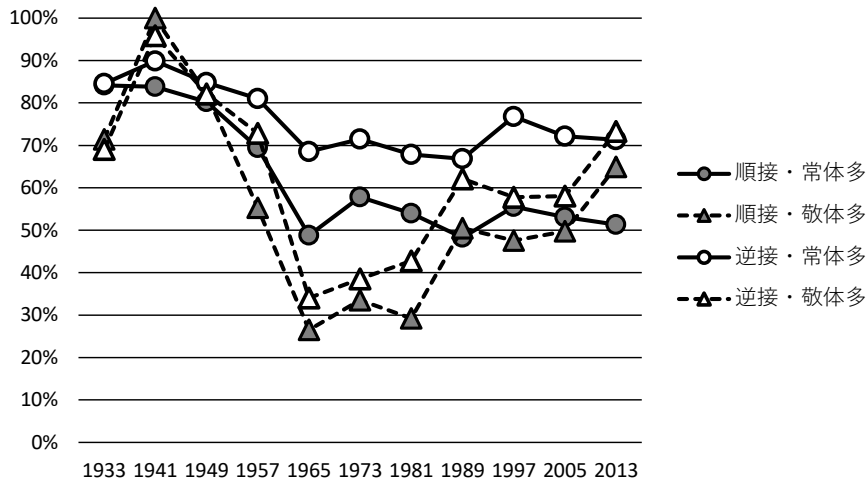


図4 各刊行年の接続詞使用サンプル率

図4によれば、接続詞の使用サンプル率は刊行年によってまちまちである。例えば、1941・1949年のようにどの用法・口語文体でも使用サンプル率の高い年もあれば、1965・1973・1981年のように敬体多の文体で使用サンプル率の低い年もある。このような高低が生じる要因として、雑誌の編集方針によって掲載される記事の種類が異なっていることが考えられる。1941・1949年は硬い内容の論説文のサンプルが多い、1965・1973・1981年は敬体多のサンプルは語数の少ない短いものが多い、といったものである。接続詞自体の消長を考察する場合、編集方針のような外的要因の影響を取り除く必要がある。そこで、以下では、順接・逆接の接続詞を使用する全サンプル数に対する該当語形を使用するサンプル数の割合を「使用サンプル率」として分析を行い、接続詞内部での各語形の勢力関係の通時的変化を見ていくこととする。

次の表4～表7は、1895年～2013年の接続詞用法・口語文体ごとに接続詞の各語形の使用サンプル率の通時的変化を示したものである。1895年～1925年のデータはCHJ雑誌の中の雑誌『太陽』の口語体のサンプル<sup>3</sup>から算出したもので、近藤(2021a)(2021b)で示したものと同一である。掲出した語形はいずれかの刊行年で使用サンプル率が20%以上のものに限定している。これらは近現代の非文芸ジャンルの書き言葉において主要な語形であると言える。表中空欄であるのは、CHJ雑誌・SHC雑誌のそれぞれで使用サンプル数が少なく、抽出対象外となった語形である。また、各表の最終行には接続詞を使用するサンプルの総数を示した。各表の使用サンプル率はこのサンプル総数を100%としたときの値である。表のセルは使用サンプル率によって色分けし、50%以上は■、20%以上は■、10%以上は■

<sup>3</sup> 研究対象のテキストの詳細は近藤(2021a)(2021b)を参照のこと。



、5%以上は で示した。

表4 常体多における主な順接の接続詞の使用サンプル率の通時的変化

語形	1895	1901	1909	1917	1925	1933	1941	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
かくして	0.0%	5.4%	4.7%	10.8%	8.1%	15.8%	22.6%	14.2%	4.6%	3.5%	3.8%	7.6%	4.1%	2.2%	2.5%	0.8%
ここにおいてか	0.0%	51.7%	2.5%	5.2%	1.7%											
されば	28.6%	23.0%	19.5%	29.1%	7.6%	11.4%	9.8%	4.5%	0.5%	1.1%	1.2%	0.6%	0.7%	0.5%	0.0%	0.0%
しからば	28.6%	12.2%	19.5%	23.1%	18.1%	19.1%	16.6%	8.2%	1.7%	1.1%	0.9%	2.2%	0.5%	0.2%	0.4%	0.0%
したがって	0.0%	10.8%	39.0%	47.0%	48.0%	52.5%	59.6%	45.5%	43.8%	27.0%	30.3%	32.5%	21.1%	16.7%	12.2%	4.9%
すると	28.6%	14.9%	5.8%	10.8%	15.8%	14.6%	10.4%	13.4%	12.3%	16.4%	22.7%	15.8%	11.9%	19.1%	15.2%	14.0%
そこで	71.4%	55.4%	31.0%	35.1%	46.1%	53.7%	38.9%	37.3%	54.8%	42.3%	53.6%	45.7%	40.8%	39.7%	31.4%	32.5%
そのため	0.0%	0.0%	0.7%	1.6%	3.6%	9.9%	15.4%	15.7%	19.7%	15.1%	21.0%	24.9%	19.7%	19.1%	15.4%	17.1%
それで	42.9%	29.7%	13.0%	17.5%	21.0%	36.4%	22.0%	37.3%	32.5%	30.5%	35.6%	40.7%	33.0%	39.0%	33.5%	32.2%
それゆえに	28.6%	8.1%	3.2%	9.6%	2.4%	12.4%	10.7%	8.2%	2.2%	0.7%	0.6%	1.3%	0.0%	2.0%	2.3%	1.3%
だから	0.0%	6.8%	18.8%	5.6%	12.6%	48.0%	26.7%	39.6%	51.9%	45.8%	47.5%	46.4%	45.6%	40.4%	38.1%	33.8%
で	0.0%	21.6%	20.6%	11.2%	16.9%	15.3%	5.0%	11.2%	4.3%	2.9%	4.4%	7.9%	9.0%	7.1%	3.8%	3.1%
ゆえに	57.1%	37.8%	41.2%	39.0%	22.9%	16.8%	14.2%	6.7%	1.2%	0.7%	3.5%	3.8%	1.2%	1.7%	2.5%	2.9%
順接の接続詞 使用サンプル総数	7	74	276	250	419	404	337	134	416	456	343	317	412	408	475	385

表5 敬体多における主な順接の接続詞の使用サンプル率の通時的変化

語形	1895	1901	1909	1917	1925	1933	1941	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
されば	33.3%	33.3%	11.1%	7.7%	4.8%	5.0%	8.3%	8.7%	0.0%	0.0%	1.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
しからば	16.7%	20.0%	0.0%	0.0%	9.5%	5.0%	4.2%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%
したがって	11.1%	11.1%	22.2%	38.5%	28.6%	35.0%	33.3%	56.5%	46.0%	35.8%	25.5%	13.5%	11.2%	10.9%	9.0%	7.0%
すると	0.0%	6.7%	22.2%	7.7%	4.8%	31.7%	33.3%	13.0%	17.5%	11.3%	18.2%	18.9%	18.4%	25.5%	29.1%	30.5%
そうすると	11.1%	2.2%	11.1%	0.0%	4.8%	11.7%	37.5%	26.1%	27.0%	18.9%	21.8%	18.9%	11.7%	14.6%	7.4%	6.4%
そうすれば	5.6%	2.2%	0.0%	7.7%	0.0%	5.0%	4.2%	21.7%	12.7%	5.7%	10.9%	5.4%	4.6%	6.6%	9.0%	2.9%
そうなる						3.3%	12.5%	21.7%	14.3%	13.2%	10.9%	6.8%	7.1%	3.6%	5.3%	6.4%
そこで	44.4%	66.7%	33.3%	23.1%	47.6%	38.3%	62.5%	78.3%	65.1%	54.7%	54.5%	37.8%	42.3%	45.3%	48.1%	48.3%
そのけっか	16.7%	6.7%	0.0%	0.0%	4.8%	3.3%	16.7%	13.0%	7.9%	24.5%	10.9%	9.5%	9.7%	10.2%	11.6%	10.8%
そのため	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	4.8%	8.3%	20.8%	21.7%	27.0%	34.0%	18.2%	18.9%	18.4%	14.6%	30.7%	21.2%
そのために	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	20.8%	21.7%	20.6%	24.5%	12.7%	14.9%	12.2%	11.7%	21.2%	13.4%
それで	55.6%	33.3%	66.7%	53.8%	19.0%	41.7%	75.0%	65.2%	55.6%	37.7%	47.3%	47.3%	51.5%	55.5%	55.0%	48.8%
それゆえ	5.6%	24.4%	0.0%	15.4%	4.8%	6.7%	0.0%	13.0%	1.6%	1.9%	0.0%	2.7%	0.5%	2.9%	1.6%	0.6%
それゆえに	38.9%	24.4%	0.0%	0.0%	9.5%	1.7%	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.3%
だから	0.0%	6.7%	0.0%	15.4%	9.5%	26.7%	50.0%	60.9%	76.2%	41.5%	56.4%	58.1%	47.4%	63.5%	59.8%	57.0%
で	11.1%	13.3%	22.2%	0.0%	28.6%	25.0%	20.8%	4.3%	11.1%	1.9%	12.7%	28.4%	14.3%	19.7%	8.5%	5.5%
ですから						13.3%	29.2%	39.1%	47.6%	41.5%	29.1%	35.1%	35.2%	29.9%	25.4%	22.4%
では						13.3%	0.0%	8.7%	6.3%	17.0%	16.4%	16.2%	9.7%	13.1%	20.6%	20.1%
はたしてしからば	0.0%	26.7%	0.0%	0.0%	0.0%											
ゆえに	55.6%	57.8%	11.1%	0.0%	23.8%	8.3%	8.3%	0.0%	1.6%	0.0%	10.9%	0.0%	2.6%	1.5%	1.6%	0.9%
よって	27.8%	8.9%	0.0%	0.0%	9.5%											
順接の接続詞 使用サンプル総数	18	45	9	13	21	58	23	23	83	68	64	109	241	167	224	395

表6 常体多における主な逆接の接続詞の使用サンプル率の通時的変化

語形	1895	1901	1909	1917	1925	1933	1941	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
が	36.4%	10.0%	15.9%	16.0%	30.1%	29.8%	17.0%	17.9%	16.6%	11.4%	20.9%	16.0%	17.1%	12.9%	6.8%	6.5%
けれど	9.1%	0.0%	4.7%	2.3%	3.6%	16.3%	20.8%	17.2%	12.7%	7.1%	5.8%	4.2%	5.2%	5.1%	5.2%	3.5%
けれども	18.2%	20.0%	32.9%	13.0%	23.0%	15.4%	19.7%	13.1%	12.1%	6.0%	3.9%	3.5%	5.0%	2.6%	3.7%	1.9%
しかし	72.7%	65.7%	70.8%	71.8%	64.0%	85.3%	86.8%	91.0%	86.1%	74.7%	76.8%	80.7%	76.1%	73.8%	72.3%	67.4%
しかしながら	9.1%	15.7%	21.3%	36.6%	20.9%	21.9%	32.9%	15.9%	8.1%	1.7%	3.0%	3.0%	2.8%	4.0%	3.2%	1.7%
しかるに	18.2%	57.1%	50.5%	64.9%	32.6%	40.9%	42.9%	22.1%	6.7%	3.5%	3.2%	2.7%	0.7%	0.9%	1.4%	0.0%
だが	9.1%	0.0%	4.0%	1.1%	11.5%	41.3%	27.8%	36.6%	41.2%	32.4%	42.5%	42.7%	29.9%	37.4%	40.5%	41.3%
ところが	45.5%	27.1%	24.6%	20.6%	32.0%	46.4%	31.3%	44.8%	47.1%	43.9%	45.2%	44.0%	37.5%	39.0%	30.9%	26.3%
逆接の接続詞 使用サンプル総数	11	70	301	262	469	416	371	145	495	649	431	405	578	572	650	537

表7 敬体多における主な逆接の接続詞の使用サンプル率の通時的変化

語形	1895	1901	1909	1917	1925	1933	1941	1949	1957	1965	1973	1981	1989	1997	2005	2013
けれども	16.7%	15.9%	33.3%	16.7%	50.0%	13.8%	47.8%	34.8%	18.1%	2.9%	6.3%	3.7%	3.7%	10.2%	5.4%	3.3%
しかし	61.1%	52.3%	66.7%	88.9%	75.0%	82.8%	82.6%	95.7%	92.8%	80.9%	70.3%	52.3%	73.4%	71.3%	69.2%	67.6%
しかしながら	44.4%	22.7%	33.3%	5.6%	18.8%	12.1%	30.4%	21.7%	3.6%	1.5%	1.6%	2.8%	4.6%	3.0%	1.8%	2.8%
しかるに	66.7%	54.5%	11.1%	27.8%	37.5%	19.0%	17.4%	8.7%	4.8%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%	0.0%	0.3%
しかれども	5.6%	27.3%	0.0%	0.0%	0.0%											
それでも	0.0%	4.5%	0.0%	5.6%	12.5%	8.6%	8.7%	13.0%	4.8%	7.4%	18.8%	17.4%	20.3%	19.8%	22.3%	25.8%
だが	0.0%	6.8%	0.0%	0.0%	0.0%	6.9%	34.8%	30.4%	19.3%	11.8%	7.8%	19.3%	10.8%	13.2%	17.0%	12.4%
でも	0.0%	2.3%	0.0%	0.0%	0.0%	8.6%	30.4%	0.0%	9.6%	22.1%	28.1%	37.6%	33.6%	45.5%	44.6%	45.3%
ところが	22.2%	13.6%	33.3%	22.2%	25.0%	43.1%	73.9%	65.2%	61.4%	41.2%	51.6%	37.6%	50.2%	49.7%	46.0%	50.1%
逆接の接続詞 使用サンプル総数	18	44	9	18	16	60	24	23	63	53	55	74	196	137	189	344

表4～表7から、明らかな量的な増加・減少の傾向が見られる語形を取りだしまとめたものが、次の表8である。

表8 明らかな増加・減少の傾向が見られる接続詞

	増加	減少
順接	常体多 そのため  敬体多 すると、そうすると、そのため、そのために、ですから、では	かくして、ここにおいてか、されば、しからば、したがって、それゆえに、で、ゆえに  されば、しからば、それゆえ、それゆえに、はたしてしからば、ゆえに、よって
逆接	常体多 だが	けれども、しかしながら、しかるに  けれども、しかしながら、しかるに、しかれども

表8から以下のことが言える。まず、増加傾向の語形と減少傾向の語形を比較する。増加傾向の語形の中には、近藤 (2021a)(2021b) によると CHJ 雑誌の小説・戯曲の会話文で主に使用される「すると」「そうすると」「そのために」「それでも」「だが」「でも」があり、減少傾向の語形の中には CHJ 雑誌の非文芸ジャンルの文語体で主に使用される「ここにおいてか」「されば」「しからば」「はたしてしからば」「ゆえに」「よって」「しかれども」がある。つまり、増加傾向の語形は話し言葉的性質の強いのに対し、減少傾向の語形は書き言葉的性質の強いことが分かる。近藤 (2021a)(2021b) は、明治・大正期の口語体の発生・定着の過程において、敬体多の口語文体ではより話し言葉的性質の強い語形の使用が増加し、一方常体多の口語文体ではそのような傾向は見られず、文語体で多用される書き言葉的性質の非常に強い語形も引き続き使用されたとする。それが、昭和・平成期に入り、敬体多では明治・大正期から引き続いて話し言葉的性質の強い語形の増加が進んだことになる。ま

た常体多でも、書き言葉的性質の強い語形が減少し、相対的に話し言葉的性質の強い語形の使用が増加したことになる。このように、口語体で使用される接続詞の語形の通時的変化は、大局的には書き言葉の話し言葉的性質の強化という変化の中に位置づけられると言える。

次に、常体多と敬体多の間で比較すると、常体多は増加傾向の語形よりも減少傾向の語形の方が数が多く、結果的に主要な語形数が少数に固定されていく。それに対し、敬体多は減少傾向の語形もある一方で、増加傾向の語形も少なくなく、結果的に主要な語形は常体多より種類に富む状態が維持されている。常体多においては、明治・大正期に見られた多様な語形が昭和・平成期で整理され、主に使用される語形が限定される時期に入っていると見られる。敬体多にはそのような傾向が見られないのは、敬体多のサンプルには、初めから書き言葉として書かれた文章だけでなく、インタビュー・座談会等の話し言葉の記録という性質の異なる文章も多く含まれており、その多様性が語形の種類の多さにつながっているためと考えられる。

## 7. おわりに

以上、『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌レジスターを資料として、昭和・平成期の非文芸ジャンルの書き言葉における順接・逆接の接続詞の口語文体との対応関係や量的な通時的変化を分析した。まず、短単位 **n-gram** を利用して接続詞の網羅的な抽出を行い、順接の接続詞は 31 語形、逆接の接続詞は 17 語形を得た。次にこれらの語形の口語文体割合を見ると、語形と口語文体の間には対応関係が存在し、それは書き言葉的・話し言葉的性質の強弱に対応していることが明らかになった。最後に、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』のデータと合わせて、明治期から平成期にかけての量的な通時的変化を概観した。話し言葉的性質の強い語形が増加すること、また特に常体多の口語文体では語形の整理が進み、少数の語形が使用されるようになることが明らかになった。

今後の課題としては、通時的変化についてより詳細な考察を加えることが必要と考える。変化の傾向の分類については、統計的手法を取り入れ、より多くの語形について分析対象としたい。また、変化の要因についても、語形間の用法の差異にも目を配りつつ考察を深めたい。

## 謝辞

本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」による成果の一部である。

## 参考文献

- 青木伶子 (1973) 「接続詞および接続詞的語彙一覧」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本語文法講座 6 接続詞・感動詞』 明治書院, pp.210-253.
- 石田裕子 (2009) 「中央公論にみる接続表現の変遷」 『同大語彙研究』 11, pp.3-16.
- 市川孝 (1976) 「副用語」 『岩波講座日本語 6 文法 I』 岩波書店, pp.219-258.
- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間淵洋子編 (2023) 『昭和・平成書き言葉コーパス』 バージョン 2023.5, <https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/>
- 京極興一・松井栄一 (1973) 「接続詞の変遷」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別日本語文法講座 6 接続詞・感動詞』 明治書院, pp.89-136.
- 国立国語研究所 (編) (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』 大日本図書

- 国立国語研究所 (編) (2019) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』 (短単位データ 1.2) [https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji\\_taisho.html#zasshi](https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/meiji_taisho.html#zasshi)
- 近藤明日子 (2021a) 「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙の通時的变化—逆接の接続詞を例に—」 近代語学会 (編) 『近代語研究 第二十二集』, pp.47-67.
- 近藤明日子 (2021b) 「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙の通時的变化—順接の接続詞を例に—」 田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信 (編) 『コーパスによる日本語研究 近代編』 pp. 115-136.
- 近藤明日子 (2023) 「『昭和・平成書き言葉コーパス』 (バージョン 2023.5) 雑誌レジスター 概説書」 <https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/doc/abstract-shc-zasshi-202305.pdf>
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』 小学館 (ネットアドバンス社提供サービス「ジャパンナレッジ」コンテンツ <https://japanknowledge.com/contents/nikkoku/> による)